



10月号 令和5年9月29日発行

荏田小だより

横浜市都筑区荏田南町694番地 [TEL911-0149]
[http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/eda/]



イグ・ノーベル賞の記事にふれて ～子どもたちの探究心をくすぶるとは～

校長 伊藤 智樹

来週から10月になります。9月の残暑の厳しさは例年にないもので、体育や校外活動も熱中症指数と気温を確認しながらの教育活動でした。10月の運動会に向けて屋外での活動も本格的になってきます。10月とはいえ、日中は気温も高くなります。引き続き暑さ対策をとりながら活動していきたいと思います。また、新型コロナ感染症と同様インフルエンザ感染症も9月中旬以降、市内で増加傾向にあり、学級閉鎖数も多くなってきました。引き続きご家庭での健康観察を継続していただくとともに体調不良が見られる場合はご無理をなさらないようにお願いします。教室でも換気等に配慮していきたいと思います。

2023年のイグ・ノーベル賞に10組の業績が選ばれ、日本からは17年連続受賞という新聞記事を目にしました。

「イグ・ノーベル賞」とは、ノーベル賞のパロディとして1991年に創設された、世界中の独創性に富んださまざまな研究や発明などに対して贈られる賞。近年は、冗談のようでも科学に基づいた本格的な研究が選ばれることが多い。接頭語としてのイグには否定的な意味があり、「裏ノーベル賞」ともいわれる。毎年秋、ノーベル賞の発表と同じころに表彰式が行われ、ユーモアやオリジナリティーに富んだ各賞は、ノーベル賞と同様に、物理学、化学、平和、経済学、医学、文学など、毎年10組前後が選出される。

2023年の日本人受賞（栄養学）テーマは「電気を使って味を変える～明大の宮下芳明教授、東大の中村裕美特任准教授～」で、テレビニュースでも紹介されていました。2013年の化学部門では食品メーカーが「タマネギ涙の化学反応」というテーマで涙を仲立ちする酵素を発見し、涙が出ないタマネギの開発に結び付け商品販売につながった例もあります。

この2つの例は、研究者たちが、日常生活の中から生じた疑問に対して地道に研究を進めてきた結果ではないかと思います。ノーベル賞のように華やかな授賞式や賞金等はありませんが、**疑問解決への探究そのものが価値あるもの**と思います。



「探究学習」とは、子どもたち自らが課題を設定し、解決に向けて情報を収集・整理・分析したり、周囲の人と意見交換・協働したりしながら進めていく学習活動のことです。探究学習では、子どもたちの思考力や判断力、表現力などの育成を目的としています。小学校や中学校では「総合的な学習の時間」で、高等学校では「総合的な探究の時間」などで、探究学習を導入した授業が行われています。

反対に、探究的でない学びとは、教科書を使った講義を受けて、正解が決まっている問題を解くような授業を受けることだと言えます。探究学習では、あらかじめ決められた正解がない中で答えを考え出す活動を通して、導き出した結果だけでなく、どうやってそこにたどり着いたのかのプロセスが重視されます。



今後AIの発展や社会の仕組みなどの変化により、今学んでいるスキルや知識は、役に立たなくなることも予想されます。その時に重要となるのは、「知識を使いこなす力」だと思います。そして、知識を使いこなすには、「問題を設定する力」が必要です。これらの力は総合的な学習の時間を含めた各教科・領域等における探究的な学習プロセスを通して培われていきます。

7月号にも記載しましたが、AIの発展や社会の仕組みが変化しても私たち教職員の存在意義は「**次世代を担う子どもたちの育成**」です。教師としての矜持をしっかりとって教育活動にあたっていきたいと思います。